

---

# バカとテストと召喚獣と・・・、

下之宮 海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣と・・・、

### 【Nコード】

N4244X

### 【作者名】

下之宮 海

### 【あらすじ】

自分の名前しか記憶がない青年、天野快は文月学園てんのかいに転校することになっていた。床に落ちていた謎の物体を拾った直後に灰色のオロラが降りてきて・・・。「行くぜ・・・サモン！変身！」人気ライトノベル「バカとテストと召喚獣」と「仮面ライダーディケイド」のクロスオーバー作品です！（時々ガンダムも・・・）

## 俺と記憶と破壊者と

一人の青年「天野快」（てんのかい）、彼は一切の記憶がない。辛うじて自分の名前を憶えている程度である。気が付けば自分の家と思われるどこにでもありそうな二階建ての家のリビングで倒れていた。自分のことを少しでも思い出そうとしていると。テーブルの上に鞆を見つけた。そのなかには「文月学園生徒手帳」と転入届、そして教科書一式が入っていた。さらにその生徒手帳の間に謎の「2 F」と書かれた紙が四つ折りにされて挟まっていた。どうやらこの鞆は文月学園の指定鞆のようだ。

「どうやら俺は、文月学園」とやたらに転校することになっている。」と理解した快はとりあえず、外に出てみようかと玄関に向かった。リビングから出るために扉に手をかけたその時、ガタン！という大きな音が響き渡った。「！？」驚いて振り向くと、床の上に妙に埃をかぶったベルトのようなものが転がっていた。快は吸い寄せられるようにそれを拾おうと手にかけた。すると、天井に突然、灰色のオーロラのようなものが広がり、徐々に快に迫り、そして快を飲み込んだ。

目を開けるとそこには宇宙が広がっていた。しかし、宇宙ではないことがすぐに分かった。快の周りに広がる宇宙には、地球と、その周りに等間隔に点状する、いくつもの地球があったのだ。

「どこだ？」  
「ここは？」おもわず口にしたその言葉に、返事が返ってきた。「かつて、大きな戦乱がありました。」振り返ると、そこには20歳前半のような青年が立っていた。驚く快をよそに彼は話し続ける。「自分たちの世界の破壊を防ぐため、一人の破壊者に立ち向かった大勢の戦士たちは、仲間とともに、その破壊者と戦いました。」気が付けば、眼下に広がる宇宙は荒野に姿を変えていた。飛び交う光線鳴り止まぬ爆音、立ち上る黒煙。その中心にある存在に、快は驚いた。快の手にあるリビングで拾った物が、光を放っていたのだ。そ

れは、あたたかくもあり、鋭くもあつた。「しかし。」青年がつぶやく。赤と黒の龍がその存在に迫る。だが放たれた光線によって、二体の龍は地面に叩き付けられる。「その存在は、あまりにも強すぎた。」空中に現れた線路を走る赤い列車が先頭の車両を粉微塵に破壊され、墜落する。また風景が変わった。そこには顔をそむけたくなるほど大量の人が倒れていた。倒れている人の腰には、ベルトのようなものが巻かれていた。その中央に立つ存在は何のダメージもなさそうだった。「デイケイド。」その言葉に快は何かを感じた。青年は語る。「世界を破壊する存在にして、世界を創造する者。彼はそう呼ばれていました。」「デイケイド……。」快はそうつぶやく、デイケイドと呼ばれる存在を見た。そして「！」あることに気が付いた。快の手にあるものとデイケイドの腰に巻かれているものが、全く同じであったのだ。「デイケイドドライバー」という言葉が頭に直接響いた。すると、突然赤い体をした何者かが、「待て……。」と言い立ち上がった。「クウガ」というフレーズが頭に響いた。そして立ち上がった者の名前ということを理解した。いや、思い出したのだ。「ハアアア……。」力を貯めるクウガ、すると周りの砂利、そして倒れている人の体が宙に浮き、クウガの体が赤色から、黒一色になった。デイケイドと黒いクウガが互いに拳に力を籠め、激突する。そこで風景が宇宙に戻った。「言い忘れました。僕は紅渡くれないわたるといます。」青年、紅渡が自己紹介をした。そして「よろしく、天野快。」といった。快には理解できなかった。(なぜ、こいつは俺の名前を……)と思っていると、さらに衝撃的なことを言った。「いえ……、デイケイド。」「！」快に衝撃が走った。(こいつ、何を言ってるんだ?)「あなたはあの後、空間の亀裂に放り込まれ、行方知れずになりました。探すのは苦労しましたよ。」渡は苦笑しながら言う。しかし快にはそんなことは耳に入らなかった。(こいつの言っていることが本当なら、あれは俺が……)半ば混乱しながら考える。そして意を決して問う。「なぜ、俺がそんなことを……?」言うと渡は「創造は破壊からしか生まれませ

ん。あなたが進んだ道には常に破壊と創造があつた。「諭すように言う。「デイケイド、あなたにここで歩みを止められるわけにはいきません。あなたにはまだやってもらうことが沢山あります。「突如宇宙が砕けた。驚く快をよそに、渡は続ける。「デイケイド、そろそろあなたを先ほどいた世界に戻します。記憶がないようなら、その世界で集めてください。「渡はそう言うと、快から離れていった。「待ってくれ！俺はまだ聞きたいことが・・・！」しかし、渡は消えてしまった。一気に視界が暗転する。快の意識は深く沈んでいった・・・。

## 俺と記憶と破壊者と（後書き）

読んでいただいて本当にありがとうございます。自分なりの新設定や新キャラもつけていくので、応援よろしくお願いします！

## 俺と初日と紙の謎と・・・、

気が付けば、快は電車の中にいた。「夢か・・・。まあ、それならそれでいいんだけどな。」ほっとしたのも束の間、快は抱えている鞆に何やら固い感触があるのを感じた。ガバツ！見てみると鞆の中には教科書、筆箱のほかにはリビングで拾ったもの・・・。デイケイドライバーが入っていた。（夢じゃなかったああああ！）シャウトしそうになるのを必死にこらえる。傍から見ればそうでもないが、快は今ものすごい勢いで冷や汗が噴出している。なぜ入っていたかはわからないが、持ってきたからにはどうにもできない。（と・・・とりあえず学校でばねえようにしないと・・・！）転校早々物を没収されるなんて恥は誰もかきたくないものである。とりあえず上に教科書をのせて隠すことにした。（しっかし・・・、これはなんなんだ？）手に持っているのは「2・F」とかかれた紙である。（誰かに聞くにも、文月学園の関係者なんているのか？）キョロキョロと辺りを見回す。すると、（おっ）同じ鞆を持っている女の子を見つけた。（女の子かぁ・・・。ん？）ふと見ると、その女の子の顔がわずかに赤らんでいる。そして首を横に振っている。その後ろには、中年男性がいた。何やら拳動不審だ。（ははあ、なるほど。）気づくが早いのか、快はズンズンと他の乗客を押し分け、女の子の前まで行くと、その手をつかみ「おはよう！元気？」と声をかけた。女の子が「へっ？え？あつ」と言ってる間に、快はその手を引いて、もと来たところへ戻った。そして隣の両に移った。そこは比較的人が少なく、二人なら余裕を持って座ることができた。「ふう」と一息つき、「大丈夫だった？」と声をかけた。その女の子は、「あつ、はい。助かりました。ありがとうございますっ！」と心底嬉しそうに返事をした。「うんうん。」とうなずいていると、「あの・・・どうしてその・・・ち・・・痴漢されてるってわかつたんですか？」と聞いてきた。「ああ、あの君の拳動と、あの変態エロおやじの拳

動を見れば120%痴漢だと分かる。」と答えると「へ・・・変態  
エロ・・・」と顔を赤らめてしまった。そして快は、「あ、そうそ  
う。教えてほしいんだけどさ、これって何？」問題の「2 F」と  
書かれた紙を見せた。すると女の子はきよとんとして、こういつた  
「あの・・・、これクラスだと思えます。」と言った。「クラス？  
聞き返すと、「はい。2年F組のことだと思えます。私と同じクラ  
スですね。」と言った。「へえ、どんなクラスなの？」聞いてみた  
らこんな答えが返ってきた。「ええつと・・・その・・・要するに  
ですね・・・2年生の中で、一番お勉強が苦手な・・・その・・・  
おバカさんがたくさんいますっ!」・・・。「マジで？」



俺と初日と紙の謎と・・・、（後書き）

快、ついに登校です！学校に向かう電車の中でクラスメイトを痴漢から助けた快。この助けた女の子、話し方でわかると思いますが、誰なのかは次回発表します！

俺とクラスと担任と・・・、

ところ変わって文月学園の最寄駅を少し出たところ。

快は電車の中で助けた女の子と歩いていた。電車を降りてから、お互いが自己紹介をしていないことに気づき、

「あ、忘れてた。俺は天野、天野快だ。」

「天野君ですか。私は姫路瑞希ひめじみずきと言います。よろしくお願いしますね。」

ニコツと微笑みながら自己紹介され、快は姫路に好感が持てた。談話しながら歩いていると、姫路が突然こんなことを聞いてきた。

「そう言えば天野君って、転校生なんですよ。前通ってた学校はどんなところでしたか？」

ギクウ！凍りつく快。無理もない。彼は自分の名前以外記憶がないのだ。どう答えたら良いか一瞬思案し、悩んだ末

「あ・・・ああ・・・まあ、遠いところだよ、遠いところ。」

と曖昧に答え、これ以上追究されないうことを祈ったが、

「遠いところですか。国外ですか？」

追究されさらに困った快は、辺りを見回し、必死に考えた。

「え、ええつと・・・そう国外！ロサンゼルス！」

近くの看板に「ロサンゼルス」と書いてあったので丸々利用させてもらった。そして追究される前に、

「あ！俺今から職員室行かなきゃ！じゃまた後でな！」

有無を言わさずその場からダッシュで逃走。

「あ！待ってくださいー！」

というこえが聞こえたが、気にせず、（すまん、姫路・・・！）と心の中で謝っておく。

思い切り走ったので学園にはすぐ着いた。快は職員室の前にいる。「よし・・・。」

扉を開け、目の前にいた眼鏡の若くそれなりに美人な女性教師に声

をかけた。

「すみません。今日からこの学校でお世話になる天野快です。」  
すると、

「あ、はい、ではついてきてください。」

と落ち着いた感じで隣の応接室に案内され、来客用のソファに座らされた。

「では、少し待っていてください。」

というとその人は応接室から出て行った。

5分ほどすると、今度は髪を後ろで束ねた老婆が入ってきた。老婆と言っても腰は真っ直ぐでそれほど老いは感じられず、雰囲気から幾つもの年を重ねて見えた。

「あんたが転校生ってやつかい？」

そう問われ、

「はい」

と短く答えた。

老婆は快の向かいに座り書類を取り出し読み始めた。

「天野快・・・1994年7月28日生まれ・・・肉親関係なし・・・

」。

「！」

思わぬところで記憶の破片を手に入れることができた快はわずかに反応した。

「学歴・・・ほう、ロサンゼルスの小中一貫校・・・なかなかいいじゃないか。」

出まかせで言ったロサンゼルスが本当になっていた。一通り書類を讀んだ後、

「私がここの学園長、藤堂カヲル（とうどうかをる）だよ。」  
と自己紹介をされた。

「はい、よろしく願います。」

「じゃあ、手短に言うけど、お前が入るクラスは・・・2-Fでいいんだね？」

なぜか確認を取られたが、

「はい」

と答えた。すると、

「本当だね？後悔しないね？」

しつこく聞いてくるので、

「はいつて言ってるでしょう。」

とこちらも言い切った。

「わかったよ。じゃあもうすぐ朝のHRが始まるから、担任の西村先生のところにいきな。」

そう言われ応接室を出ると、そこにはそれなりに身長のある快さえも圧倒されるほどの大男が仁王立ちで立っていた。

「私が担任の西村だ。よろしくな。では行こうか。」

短くそういうと踵を返して廊下を歩いて行った。快はその後ろにつき、2・Fの教室に向かった。

俺とクラスと担任と・・・、（後書き）

というわけで、快が電車の中で助けた女の子は姫路さんでした！ほかに高橋先生やババア長そして鉄人まで登場し、他のメンバーも早く登場させたいです！

そういえば、読んでいただいたらわかると思いますが、書き方を変えました。読みにくいとの指摘をうけ変更しました。感想お待ちしております。

俺とクラスと友達と・・・、

「マジかよ・・・」

快は2-Fクラスの教室の前にいるが、教室はものすごく汚い、というかボロボロだった。

「2-F」

と書かれた木札は片方の金具が外れて、ぶら下がっているし、教室のドアは引き戸ではなく障子だった。しかも、穴が開いている。そこから覗くと、全員、机と椅子ではなくミカン箱と座布団であった。最初の快の発言が、この教室の感想である。そこに、

「では、私が呼んだら入ってこい。」

と当然のように、西村先生が入っていた。

「えー、ではHRを始める。その前に、転校生を紹介する。」

『ウオオオオオオオ!!』

世界が揺れたかと思うほどの大歓声だった。

「先生！その転校生は女子ですか!?!」

1人の男子が聞いていた。声の弾み様から相当期待しているようだった。

「いや、男だ。」

『チクシヨオオオオオオ!!』

またもや大きな叫び声が聞こえた。

「じゃあ、入ってこい。」

と呼ばれた。(入りづらいなあ)と思っただが、意を決して障子を開けた。スーッ、ガタン!

なぜか少し離れた位置にある障子が外れた。

『・・・・・・・・』

沈黙。

「あ、あの・・・今日からお世話になります、天野快と言います。よろしく願います。」

(気まずいイイイイ！なんでだああ！なんで関係ない障子が外れるんだあああ！)

「あー、私は授業に必要な道具を持ってくるから、全員静かに待っているように。天野は開いているスペースを使い。」  
どこか決まりが悪そうに西村先生は教室を後にした。

「ハア・・・」

溜息混じりにスペースを探していると、

「ここ、空いてるよ。」

と1人の男子生徒が自分の後ろを示した。

「あ、ありがとう。」

快は、もらったミカン箱と座布団をそこに置き、座った。

「天野君だっけ、僕は吉井明久よしあきひさよろしくね。」

「ああ、よろしく明久。」

ここで下の名前をつかったのは、関係をつくろうとした快の考えである。

「あ、名前で呼んでくれるんだ、じゃあ僕も快って呼ぶけどいいかな？」

「ああ、そうしてくれ。」

2人が仲良くなるのに、そう時間はかからなかった。

「へえ、快も1人暮らしなんだ。ぼくと同じだね。」

「お前もなのか、奇遇だな。」

「僕の家族はね、みんな海外で、働いてて、その仕送りで生活してるんだ。でも、そのお金でゲームを買ったりしちゃうんだけどね。」  
はは、と苦笑しながら、明久は言う。そんな明久が、快は少し羨ましかった。

「そうか・・・家族がいるのか・・・。」

「え、なんか言った？」

「ああ、いや、こつちの話。」

「ふうん、あ、そうだ、快ってこつちの好き？」

ガサガサ、と鞆を漁り、あるものを快の前に置いた。そこには、

《Hなお姉さんがピー！してズギューン！してあ・げ・る》  
と書かれた本、要はエロ本があった。

「ブフオツ」

おもわず吹いてしまった快。

「いやあ、やっぱり巨乳はいいよね、最高だよ。」

とか言いながら明久はエロ本の感想を述べている。そこへ、ゆらりとドス黒いオーラが来た。

「へへ、アキってこういうのが好きなんだ〜・・・」

「へ？どしたの美波、ってそっちを向いた瞬間腕が痛いイイイイイ  
！！」

明久は一瞬で美波と呼ばれるポニーテールの勝気そうな女の子に腕十字固めを極められていた。

「あ、君転校生だね。ウチは島田美波、しまだみなみ「ぎゃああああ」仲良く  
しましょ。」

ニコニコと笑顔で言われるが、人に腕を極めているやつに仲良くと言われても、めちゃくちゃ怖いだけである。

「は、はは・・・よろしく。」

半笑いであいさつする快の横に、

「おい、転校生、あんまりそいつに近づくな。バカがうつるぞ。」

快より大きいが、西村先生よりは小さいオールバックの男子がいた。

「雄二！快に変なこと吹き込まないでよ！」

明久が反論するが、

「何言つてんだ、鉄人の私物売りさばいて、観察処分者になった大  
バカが。」

と軽くあしらわれている。

「鉄人？」

快が聞くと、

「ああ、俺たちの担任のことだ。俺たちはやつに幾度となく鉄拳制裁をつけ、様々な品を没収された。つたく、あいつの勘の鋭さつたらないぜ。・・・あ、俺は坂本、坂本雄二だ。」



「よろしく雄二。あと、観察処分者ってなんだ？」

「召喚獣が実体化する、と言えば聞こえはいいが、要は学園一の問題児ってことだ。主に教師に頼まれた雑務をこなす。」

「召喚獣？」

「そうか、知らなかったな。ここの学園長がつくったシステムでな、生徒の勉強意識の向上を目指してつくられた。生徒はこの召喚獣を戦わせて、召喚獣戦争をする。勝てば設備がランクアップするし、負ければランクダウンする。召喚獣の強さは、生徒次第で、戦争する前にテストを実施して点数を取る。その点数が高ければ強いし、低ければ弱い。」

「へえ、じゃあ明久はバカって言われてたから弱いのか。」

「ああ、そうだ。」

「ちよつと！さすがにそれは聞き捨てならないな！」

やっと解放された明久だが、

「アキ、まだ終わってないんだから！」

と今度は足技をかけられていた。

「・・・中々上物・・・」

「うわあ！」

快の横で音もなく明久の工口本を読んでいる明久ぐらいの身長の子がいた。

彼は無言でページをめくり、誰も話しかけられない雰囲気をつくっていた。次のページを開いたその瞬間、

ブシャアッ！

突然、彼の顔に血飛沫が舞った。そして、バタリ！とうつ伏せに倒れ、ピクピクと動いている。

「おい！大丈夫か！？」

快が抱き起すと、震える腕を上げ、グツ、と親指を上に向け、パタリと降ろした。

「おい、雄二、明久、大変だ！」

慌てふためく快に、2人は、全く気にせず

「ああ、気にするな、こいつは土田康太、いつものことだ。」

「はい、ムツツリーニ、輸血パック。」

「どうも……。」

と輸血しながら、ムツツリーニと呼ばれた彼は、快にあいさつした。

「お、おう……。」

まだ落ち着かない快に、雄二が、

「こいつはとんでもないスケベでな、しょっちゅう鼻血を出してる。しかもあんまりしゃべんないからな、寡黙なる性職者だ。」

「ムツツリーニはね、すごいんだよ。保健体育なら、Aクラスにも負けないんだよ。それ以外は全然だけどね。」

明久がそういうと、ムツツリーニは快に名刺を差し出した。そこには彼のと思える電話番号と、こんな文が添えられていた。

「《いつもあなたの真後ろに……ムツツリ商会》……なんだこれ?」

「こいつが経営してる商会だ。そこに電話して依頼すると、金を払えばすぐ写真やらをくれる。」

(何者だ……こいつは)

そう思っていると、快の右横に、また1人やってきた。

「おぬしも気をつけろ、転校生。わしも幾度となく、写真を撮られておる。」

見ると、そこには、おもわず見惚れるほどかわいい女の子がいた。しかし明らかにおかしかった。

「なんで君は女の子なのに男子用制服をきて、武家みたいな喋り方なの?」

そう聞くと、その女の子は、

「わしは男じゃ!男が男用の制服を着るのは当たり前であろう!」と怒っていた。

「こいつは木下秀吉性別はれつきとした、『秀吉』だ。」  
雄二がそういうと、

「だから男じゃと言つとろつにー!」

とまた怒っていた。

「席に着け、これから授業を始める。」

ガラツ、と西村先生が入ってきた。

「えー、授業に入る前に一つ連絡事項だ、2時限目の現国はなくなる。召喚獣の再調整をするようだ。」

着替えなくていいから、体育館に行くように。」

『ざわざわ』と教室が少し騒ぐ。

「にしても快、お前、すごいタイミングで転校してきたな。」  
雄二が言った。

「何が？」

と聞くと、

「転校早々、学園の醍醐味が味わえるってことだ。」

ともつたいぶるように言われ、

「だから何がだ？」

もう一度聞くと明久が、

「今度やるんだよ、戦争を、さっき話してた召喚獣戦争をね。」

と言って快の問いに答えた。

俺とクラスと友達と・・・、（後書き）

みなさんこんにちは、夜ならこんばんは。

ついに主要メンバーを登場させることができました！

次回から、対Dクラス戦が開始されていくので、おたのしみに！

俺と検査と丸腰と・・・、

1 時限目の英語は、西村先生が少し遅く来たこともあり、プリント学習になった。

(どれどれ・・・)

快は送られてきたプリントに目を通す。そこには、バラバラの単語をつなげて文を書く問題や、英文の読解問題があった。快はなぜかすらすら解くことができ、あつという間に終わってしまったので、自分の記憶について考えていた。

(俺はどうやら自分自身の記憶は生年月日と家族がないことしかないが、学力はそれなりにあるな・・・、いや、そんなことよりもあの紅渡とかいうやつ、「記憶はこの世界で集める」という言葉も気になる・・・。)

考えていると、

「よし、では今日はここまでだ。全員次の時限は体育館に移動だぞ。」

いつの間にか授業が終わっていた。皆席を立ち、体育館に向かうよううだ。

「快、行こう。」

「ああ、ちよっと待ってくれ。」

明久に誘われ、快も立ち上がり、体育館に向かうのだった。

文月学園の体育館は、天井が通常より少し高い程度で、あとはどこにでもあるような感じである。

「じゃあ、召喚獣の再調整を始めるよ。1人ずつ前に出て、召喚獣をだ出しな。」

先に来ていた学園長がそういうと、雄二が発言した。

「おい、ババア、なんでつい最近やったばかりの調整をまたやるんだ？」

後ろから学園長をババア呼ばわりする雄二に快は驚いた。

「まったく・・・、ババアと呼ぶなと言ってるだろ、毎度毎度。」  
嘆息しながら答える学園長は、不満げにこう答えた。

「召喚システムに異状が生じてね。閲覧不能な正体不明のデータがシステムに食い込んでるんだよ。あんたたちクソガキどもの召喚獣に異状がないか確認だよ。」

「正体不明？消去できないのか？」

「ああ、消去しようとしても全然ダメなんだ。まるでシステムに守られてるみたいで、気味が悪いよ。まったく、誰があんな悪戯を・・・、まあそういうことだ、さっさと召喚獣出しな。」

（召喚獣ってどんなのだろうか・・・）  
少しワクワクしながら、快は見ていた。

「サモンッ！」

一番最初に前に出たやつがそういうと、ポンッ！と尾が生えた二頭身ぐらいの人形のようなものが幾何学的な紋様から飛び出した。棍棒に武術家のような出で立ちだった。

「おお」

思わず、感心したように声を出した快は、あることに気付いた。その召喚獣は、呼び出したやつにそっくりなのである。

「うん、異状はないね。次のやつ出な。」

「あ、はい。サモン！」

次に前に出たのは姫路であった。ポンッ！とさっきと同様に召喚獣が飛び出てきた。姫路の召喚獣も、姫路にそっくりで、大きな剣と鎧でしつかり武装されていた。先ほどのより明らかに強そうだった。

「・・・異状なし。次。」

数人検査してよいよ快の番になった。前に出ると、周りから

『あいつの召喚獣ってどんなだろうな』  
という視線がきた。

「よし、サモンッ！」

勢い良く叫んだ。そしてポンッ！出てきた召喚獣は・・・なんと武装を一切着けておらず、普通に制服姿だった。

「……………え……………?」

一瞬何が起こったのかわからなかった。学園長もきょんとしている。

「あ……………まあ、異状は……………ないみたいだね。次。」

学園長は次を促した。がっくりとうなだれながら戻った快の横に

「ドンマイ。」

という言葉とともに、雄二と明久がやってきた。

「すごかったね、快の召喚獣、雄二のより丸腰だったよ。」

「ああ、俺のはメリケンサックがついてるからな。」

「……………武装があるだけマシだろ……………ハア。」

ものすごい落ち込み様の快を励まそうと話しかけたが、さらに快を傷つけた。

「あ!あそこにフィールドがあるから、快、ちよつと手合せしてよ。

外見だけで、意外と強いかもしれないよ。」

フォローするように明久が快の背中を押した。

「あ、ちよつと……………」

快は半ば無理矢理、フィールドの中に入った。

「いくよ、サモンツ!」

「どうなることやら……………、サモンツ!」

フィールドに改造学ランと木刀の明久の召喚獣と、清々しいほど丸腰の快の召喚獣が現れた。

『総合 天野快 486点

吉井明久293点』

お互いの点数が表示される。

「先手必勝!、いくよ、快!」

思い切り踏み込み、木刀で鋭い突きをしてきた明久の召喚獣の攻撃を防ぐために、腕を前でクロスさせた快の召喚獣は、ドツ!と腕で受け止めようとした。ズキリ、と腕に衝撃が来る。

「グッ!」

腕に痛みを覚えたがこらえようとする。だが、

「ハアア！」

さらに前に押され、吹っ飛んでしまう快の召喚獣はそのまま快に目掛けて飛んできた。その時、快の頭の中にディケイドドライバーが浮かんだ。一瞬、それに意識を集中してしまい、

「危ない!!!」

自分の召喚獣が飛来するのをよけれなかった。

「グハアツ！」

思いっきり快の腹に直撃した召喚獣はそのまま快もろともフィールドの外に飛び出し、そのまま明久の勝利となった。

「あれ・・・、勝っちゃった。」

驚いている明久の近くに雄二が近づき、

「勝っちゃった、じゃねえよこのバカ！素人に本気出しやがって！バシ！」と思いつき切り頭をはたいていた。

ギャーギャーと2人が言い争っているところに、学園長がやってきた。

「おかしいねえ、召喚獣が実体化するのは吉井1人のはずなんだけどね。」

不思議そうに仰向けに倒れている快の横で腕を組んでいる。

手に持っていたノートパソコンで快の召喚獣をチェックし、何も異状がないことを再確認する。

「召喚獣の設定はランダムに決まるからね、あんたのは実体化して、痛みがフィードバックして、丸腰、っていう設定になったんだろう。ま、こればかりはどうしようもないね。ほら、じゃあもう全員教室に帰んな、授業に遅れるよ。」

パンパン、と手をたたき、教室に帰ることを促している。

「ちえ、もっと強そうなのがよかったな。」

「悪いな快、こいつはどうも手加減というものを知らないらしい。」

「ごめんね、快。痛かった？」

「ああ、大丈夫だ。気にするな。」

笑ってみせる快到、ホツとしたように笑った明久と雄二であった。



そして自分だけが残った体育館で学園長は、

（おかしい、あれほどの点数があれば何か武装があってもおかしくない、一体何が原因だろうね？）

と、快が弱い原因を模索した。

時間は少し戻り快が初めて召喚獣を出したとき教室では、ポウツ、と快の鞆の中に入っていたディケイドライバーが淡く光を放っていた。それはすぐに収まったが、何かに反応しているようだった。

別の場所では、一人の中年男性が

「おのれ……許さんぞあの小僧！」

と激昂していた。すると、男の体の形がだんだんと人の形を失い、緑色をした、虫とも人とも見れない姿に変貌するのだった。

俺と検査と丸腰と・・・、（後書き）

どうもみなさんこんちは！

ついに快の召喚獣がお見えです！丸腰設定でしかも明久と同じ状況となつていますが、これが後後重要になつていきます。

そして快に迫る不穏な影、次回もお楽しみに！

感想お待ちしてます！

## 俺と飯と化学兵器と・・・、

快の召喚獣がものすごく弱いことが判明して、3時間ほどたった。今はお昼休みである。

「・・・そういえば飯持ってきたっけ？」

快は先ほどのことから立ち直り、明久たちと昼食をとる約束をしていた。したはいいが、自分が食べ物を持っているか定かではないことに今しがた気づいた。ガサガサ、とディケイドライバーを見られないように注意しながら漁ると、

(！)

声にも顔にも出さなかったが、鞆の中に先ほどまで入ってなかったパンがあった。

《漢のヤキソバパン！！》

と袋に書いてある鞆にギリギリ収まる大きな焼きそばパンだった。

(なんでだ、さっきまで入ってなかったぞ・・・。)

まあ、でも。とあまり気にせずそのパンを持って、明久達が集まっている教室の隅に向かった。

「お待たせ。」

「あ、快、こつち座って。」

明久は、自分の隣を示した。

「サンキュ」

快はそれを受け、明久の隣に座る。明久の膝の上には、弁当箱が置いてあった。明久は、なれた手つきで包みを開き、弁当箱を開けた。「！」

快はその中身に絶句した。なんと、弁当箱の中身は乾麺を半分に切ったものだった。

「いただきます。」

丁寧に手を合わせてから、乾麺をバリバリと食べる明久に驚き、近くでそれを見ていた雄二に聞いた。

「なあ、こいつの飯っていつもこうなのか？」

「ああ、そうだな。まあこれでもマシなほうか。この前は塩だけだったことがあったぞ。」

「塩だけ……」

「流石にあの時はみんなで弁当分けてやったな。」

「ごちそうさま。」

いつの間にか食べ終わっていた明久の前に近づき、

「食うか？」

焼きそばパンを半分差し出すと、

「いいの！？ホントに！？ありがとう！すごくうれしいよ！」

と半泣きで感謝された。そこに……

「あの、明久君、よかったら私の作ってきたクッキーも食べますか？」

小さな包みを持参して姫路がやってきた。すると明久は、

「あ……、ああ、その……気持ちだけ受け取るよ……。」  
と姫路から目をそらして言った。

「あ……そうですか……。」

残念そうに戻ろうとする姫路をみて、

「おいおい、明久、さすがにそれはかわいそうだろ。姫路、俺にも一個くれ。」

快は包みに手を伸ばし、クッキーを手に取り、口に運んだ。

「や、やめろー！」

雄二と明久の声が聞こえたが、快はもうクッキーを咀嚼していた。

「うん、なかなかうまいじゃ……。」

バタン！言葉の途中で快は倒れて、そのまま動かなくなった。

「だから言ったのに、ったく……。」

雄二が言い、

「あれ？明久君、天野君が動かなくなっちゃいましたけど……。」

姫路が明久に問い、

「え〜っと、あの……、きつと美味すぎて昇天しちゃったんだ

よ！ねえ！雄二！」

「あ……、そ、そうだな、うん、そうに違いない。」

「そうなんですか？美味しく倒れちゃったんですか？」

3人はそんな会話をしていたが、ガバアツ！と言葉のとおり、昇天していた快が目覚めた。

「なんだ、今のは！？」

「あ、起きた。」

「案外、頑丈だな。」

「あれ、俺、明久にパン分けて、そしたら姫路が来て……、あれ？」

「あのく、天野君、大丈夫ですか？」

目覚めた快に、三者三様の言葉をかけるすると、キーン、コーン、カーン、コーン、と予鈴が聞こえた。

「あ、授業始まっちゃいますね。じゃあ私はこれで。」

姫路が戻ろうとする姫路を見送り、

「なんだったんだ、あれは……」

と感想を述べる快に、

「あれは姫路の化学兵器だ。」

と雄二が答えた。

「化学兵器！？俺、そんなもん食ったの！？」

「まあ、化学兵器って言っても、作り方がちよつと違うだけなんだけどね……」

「どんだけオリジナリティ溢れた作り方したら化学兵器になるんだよ！？」

そんな会話を姫路に聞こえないようにしていると、

「あ、もう一個食べます？」

姫路が聞いた。それに男3人は、

「あ、ああ、いや大丈夫。」

と力なく答えるだけであった。

俺と飯と化学兵器と・・・、（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます！

ごめんなさい！まだちょっと戦争編には入れませんでした。

転校初日に姫路の化学兵器を味わった快は次回ついに初変身です！  
次回もお楽しみに！

俺と仮面と変身と・・・、

「じゃあ、またね。」

「ああ、またな。」

快が姫路の手作りクッキー（化学兵器）を食べてから、時間は経ち、放課後、快は明久と一緒に帰ることを誘われ、共に下校した。快は電車なので駅の前で別れた。

（まあ、初日にしては、よかったかな。）

と思いながら、快は電車に乗り込む。

（そういえば、今朝は、姫路を痴漢から助けたっけ・・・）

（そうそう、明久があのエロ本の話したら、島田にプロレス技かけられてたな。）

（そしたらムッツリーニがそのエロ本みて鼻血吹いてたな、あれはビックリした。）

そんな他愛のないことを思い出しながら窓の外の風景を見ると、鞆の中の固い感触、ディケイドドライバーが快を現実に取り戻した。

（破壊者、か・・・）

快は、自分の置かれた状況を確認した。快には、彼、紅渡の言葉が引っ搔かっていた。

『記憶がないようなら、この世界で集めてください。』  
という言葉について、快は疑問を持った。

（俺の記憶がこの世界に散らばっている？もしそうなら、どうやって集めるんだ？）

快は渡に聞きたいことがまだたくさんあるのだ。なぜ、俺は記憶を失ったのか、なぜディケイドになったのか、など挙げていけばキリがない。

そうこうしている間に電車は快の降りる駅に着いた

（まあ、気にしてもしょうがない。次にあいつに会ったら聞こう。）  
そう考えをまとめて、下車し、改札を通り、駅を出た快は一歩目で

立ち止まり、

「あ」

と思わず声を出した。とんでもないことに気付いたのである。

(どうやって、帰るんだ・・・?)

そう、快は渡と別れたあと、気が付けば電車に乗っていたのだ。電車の往復は、定期券に書かれていた駅を利用しただけである。どうしようかと途方に暮れていると、ポウ、とデイケイドライバーが淡く光った。

「？」

それに気づき、鞆を覗いた快の脳内に、

「！」

早送りのような映像が流れた。堰から水が流れるような感覚を覚えた時には、快は帰宅ルートを完全に把握していた。いや、思い出したと言っべきか。

「こういう時、変に気が利くな、お前は。」

そう言いながら、快は駅を後にしたのだった。

しばらく道を歩いていると、路地裏から、

『いや！離して！』

『おとなしくしろ！』

と、何やらただならぬ雰囲気の話話を耳にした快は、路地裏を覗き込んだ。

「！！！」

そこには中学生のような女の子の腕を1人の男が掴んでいた。快が驚いたのはそこではない、腕を掴んでいる男のほうである。

「あいつは・・・!!」

その男は、快が今朝、姫路を助けた際に姫路に痴漢をしていた中年男である。

「おい！何やってんだ!!」

快がそう叫ぶと、男はバツ、とこちらを見た。

「お前、まだ懲りてねえのか！」



快がそう言って近づこうとすると、

「チッ！」

と舌打ちをして、襲われていた女の子を引っ張りながら、走って逃げた。

「逃がすかよ！」

快も追いかける。

狭い路地を走り、男を追い、着いたのは廃工場のような場所だった。

辺りを見回すと、廃材を積んだところに、女の子が横たわっていた。近づこうとしたその時、ザツ、と中年男が快の前に立ちはだかった。

「この俺の楽しみの邪魔しやがって……！」

激しく怒っている男に快は、

「へっ、女の子を撫でまわしてるようなことが楽しみなんて、お前、人として恥ずかしくねえのか？」

とわざと挑発するように言った。すると男はニヤ、と不敵に笑った。「残念ながら、俺は人じゃないんでな。俺は人間なぞよりもはるかに上の存在だ。」

「は？何言ってるんだ？明らかに下等だろ。」

「減らず口が言えるのもそこまでだ！」

そう叫ぶと、男の体が見る見る変わっていった。その体は緑色に変化し、腕には長い鉤爪のようなものがついていた。

「なっ!？」

「ククク……、俺はワーム、人間に擬態し、その命を奪つ、この姿、見られたからには貴様を生きては帰さん！」

ビュン！と鉤爪が快へ襲い掛かる。快は横っ飛びでそれを躲し、近くに転がっていた鉄パイプを手にし、振り上げながら立ち向かう。

「ヤアッ！」

ガキーン！ワームの頭部に鉄パイプがヒットする。

「どうだ！」

「ふん、そんなもの効かん！」

バキッ！快は思い切り殴られ盛大に吹っ飛び、鉄パイプを落としてしまう。

「ぐあっ！」

地面に叩き付けられる快到、ワームは笑い、

「クク・・・、すぐに楽にしてやる！」

ビキ・・・ビキビキビキ！と体に亀裂が入り、また体が変わった。

フォルムは先ほどより細くなり、背中には虫のような羽が生え、両腕にはカマキリのような鋭い鎌がついていた。

ザシュツ！と鎌を快目掛けて、振りかざす。何とかよけるが、今度は蹴りが快の顔面にヒットした。

「ガッ・・・」

またもや吹き飛び、ボロボロになった快の周りに鞆の中に入っていたものが散乱する。

「貴様のような子供に、《クロックアップ》を使うまでもない。なぶり殺しにしてくれる。」

ゆっくりと近づいて来るマンティスワームを前に、

（何かないのか・・・）

圧倒的に不利な快は、何か役立ちそうなものを探す。すると、  
「！」

近くにデイケイドライバーが転がっている。そしてそれに吸い寄せられるように手に取った。そして、

「こつなったら、ダメもとだ！」

快はデイケイドライバーを腰につけた。すると、勝手にドライバーは腰に巻きつき、その横に何かが着いていた。《ライドブッカー》という言葉が頭に響き、それを聞いた。また、記憶が戻る。

（懐かしい・・・、俺はこれを使うときいつもこつ言っていた。そうだ、あの言葉だ！）

快は、ライドブッカーの中から一枚のカードを取り出し、ワームに見せるように構えた。

「バカな！？貴様、まさか！」

マンティスワームは一步後ずさった。

快は深呼吸して、叫んだ。あの言葉を、人々を守る戦士が言っていたあの言葉を。

「変身!!」

ドライバーを回転させ、カードを入れる。そしてまたドライバーをもとの位置に回転させた。

《カメンライド・・・ディケイド!》

電子音が響き、快は灰色の装甲に包まれ、それはマゼンタのカラーになり、その姿を現した。

「これが・・・ディケイド・・・!」

世界を破壊し世界を創造する力を持った戦士、『仮面ライダーディケイド』がこの世界に降り立った。

俺と仮面と変身と・・・、（後書き）

みなさん、お待たせしました！

仮面ライダーディケイド、いよいよお目見えです！いやあ、長かったです！

次回はディケイド対マンティスワームのバトルをお見せします。

ご期待ください！

俺とバトルと仮面の力と・・・、

「これが・・・デイケイド・・・！」

快は自分の姿に驚嘆する。一方マンティスワームは

「バカな！貴様、仮面ライダーだったのか！？」

と驚愕を露わにし、おもわずそう独りごちた。

仮面ライダーという言葉が、頭に響き、快にまた新たな記憶がよみがえった。怪人の種類と、その知識、そして、戦い方である。快はライドブツカ を開き、一枚のカードをドライバーに装填した。

《アタックライド プラスト！》

電子音が鳴り、ライドブツカ はガンモードとなり、快はその引き金を引いた。

「くらえ！」

銃口から無数の光弾が打ち放たれ変則的な軌道を描きながらマンティスワームの両腕の鎌に命中する。

「グアアッ！」

鎌が粉々に砕け、自身もがれきの山に突っ込んだワームはがれきをまき散らしながら立ち上がった。

「おのれ・・・、こうなれば！」

快に走り出したと思った次の瞬間ワームは見えなくなった。消えたのだ。正確に言えば、人には見えない不可視の領域に到達する能力、クロックアップを発動したのだ。快が反応するより早く攻撃に転じたワームは正面、横、後ろからと攻撃をたたき込んだ。

「ウワァ！」

快は攻撃を受け、ワームより後方に吹き飛ばされる。快はクロックアップに対応できるカードを考えながらブツカを開き、カードを取り出した。するとこの状況では中々ありがたいカードが出てきた。

「ヘッ、10秒でカタをつけてやるぜ！」

《フォームライド ファイズ！アクセル！》

電子音が鳴り、快が姿を変えた。仮面ライダーファイズの高速移動形態、『アクセルフォーム』となった快は腕のアクセルウォッチのスイッチを押した。「10」の文字が出てくる。

『READY・・・GO!』

快はアクセルフォームの力を完全に把握していた。10秒間だけ超高速移動が可能となるが反対に言えば、10秒で決着をつけなければならぬことも分かっていた。

「ハアアッ!」

快はワームに接近し、パンチやキックを浴びせた。

「グッ!」

ワームがよろけたところに、強い蹴りを入れ、上空に蹴り上げる。

ここまでで4秒使った。残り6秒。

快は新たなカードを取り出した。そして装填する。

《ファイナルアタックライド ファアファアファイズ!》

快もワームを追うように跳躍し、それを追い抜く、するとワームの周りには、赤い円錐のような光がワームを取り囲むように点在した。そこに鋭い飛び蹴りを浴びせ、着地し、標的が落下する前に、また飛び上がり、蹴りつけるといふ動作を超高速で行うことで、快が何人もいるように見えるようになる、『アクセルクリムゾンスマッシュ』を浴びたワームが落下する前に

『3・・・2・・・1・・・』

とカウントダウンが差し迫り、

『TIME OVER』

の音声とともに、ワームが空中で爆散した。

戦いが終わり、快は変身を解いた。

「すごい・・・これがライダーの力・・・。」

そう言つと、意外な返事が返ってきた。

「お見事です。デイクイド。」

振り返るとそこにはあの青年、紅渡の姿があった。気が付けば、周りの風景も廃工場からあの地球が幾つもある宇宙になっていた。

「そうです、これがデイケイドの力、ライダーの力を完全に手中に収め、使用する。破壊者でもあり、創造者でもあるから可能なのです。」

渡は語り始めた。快は、彼のペースに流されまいとこちらから質問を投げかけた。

「ああ、確かにすごい。だが、なぜ俺はこの力を使える？なぜ俺はデイケイドなんだ？」

すると渡は意外そうな顔をしてから、フツ、と微笑んだ。

「そうでしたね、まだあなたに伝えていませんでしたね。分かりました、お教えしましょう。」

言うと、また風景が変わった。

荒野に2人の戦士が向かい合っている。デイケイドと、黒いクウガ、クウガアルティメットフォームである。互いの拳に力を籠め、同時に激突する。

「・・・、この風景はこの前見たぞ。」

快は言うが、渡は気にせずという感じで、

「はい、しかし次が重要です。」

と言ってそのビジョンを見るよう促した。快は、2人の激突の続きを見た。

大きな爆発が起こり、辺りが煙に包まれる。煙が晴れると、デイケイドとクウガは仰向けに倒れていた。どうやら相討ちらしい。すると、ビキ！ビキビキビキ！バガン！と空に大きな亀裂が入り、一部が砕けた。ゴオオオオオ！ものすごい勢いでその穴の中に吸い込まれていくデイケイドとクウガ、

「あなたとクウガの激突のエネルギーで世界を保つ力が不安定になり、世界に亀裂が生じた。」

快と渡も追うように亀裂に入っていく。デイケイドとクウガは互いに別々の方向に飛んで行った。すると、共に吸い込まれた岩がデイケイドをかすめ、ライドブッカ が開いた。バサバサとカードが散らばり、デイケイドを取り囲むように展開した。そしてそのままデ

イケイドは1つの世界に落ちて行った。そこでビジョンは終わった。  
「デイケイドが落ちて行った世界はどこかわかりますか？」  
渡が問い、

「・・・、俺がいる世界・・・。」  
と答えた快に

「そうですね、見つけるのに苦労しましたよ。はるか遠く、ライダー  
とは関係ない世界にいたんですから。」

と話す渡に快は業を煮やし、まくしたてるように言った。

「だからなぜ俺はデイケイドなのかと聞いているだろ！！」  
すると、渡は落ち着いてこう答えた。

「デイケイド、あなたに記憶を集めるように言ったのは僕です。し  
かし、まだ知ってはいけない記憶もある。それを知ってしまえばあ  
なたはあなたでなくなるかもしれません。」

一瞬、どういうことだ、と言いたくなつたが、何やら、先ほどとは  
違う雰囲気には圧倒され、閉口している快に、今度は優しく微笑みな  
がら言った。

「あなたには、そんなことよりやらなければならないことが沢山あ  
る。先ほどの戦い、あなたはワームと戦い勝ちました。しかし問題  
はそこではなく、なぜワームがいたかです。」

「！！」  
快は瞬時に理解した。

「そうですね、先ほど見せた世界の亀裂を通り、あの世界までやって  
きたのです。あなたにはそれを駆逐してもらいたい。あなたにはす  
でにあの世界との関係が出来上がっている。」

快の脳裏に明久や雄二達の顔が浮かぶ。

「・・・、分かった。」

沈黙し、短く答えた快に、安心したように笑い、

「では、頼みましたよ。あなたの力で守ってください。あの世界を・  
・・・」

そう言い、立ち去ろうとする直前



「あ、教えてあげられなかった代わりに言っただけなんですけど、プレゼントを用意しておきました。楽しみにしておいてください。では。」  
と言い、渡は今度こそ立ち去った。風景もいつの間にか路地の入口まで戻ってきていた。

「……、やってやるよ、くそつたれ。」

快は小さくつぶやき、決意を固めたのであった。

俺とバトルと仮面の力と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！

快、初勝利です！書いていて興奮しました！最後のアクセルクリーム  
ゾンスマツシユは私の好みです。

次回からは、いよいよ、長かった序章を終え、戦争編が始まります。  
お楽しみに！

俺とバイクと俺ん家と・・・、

マンティスワームとの戦いからしばらく経ち、快は自宅のすぐそこまで来て、ふと思いついた。

「・・・そういえば、プレゼントってなんだ？」

楽しみにしている、と言われたのでそれなりに楽しみにしながら自宅の前に着くと、玄関前に大きなバイクが置いてあった。

「・・・もしかしてこれか？」

そのバイクに触れると頭に『マシンデイクライダー』という言葉が響いた。これは、デイクイドが乗るバイクのようだ。

「プレゼントというのはお前か？」

冗談交じりに話しかけてみた。すると、ブオオン、と、まるで肯定するかのようにアイドリングした。キーも刺さってないにもかかわらず。驚いた快はしげしげとバイク、デイクライダーを観察しあることに気付いた。鍵穴がないのである。ならばどうやって先ほどアイドリングしたのか、考えていると、さらに気付いた。座席部分から見ると、視界の下にデイクイドのマークがあり、それに触れると、デイクライダーは小さくなり、快の手の平の上に収まるサイズになった。

「まあ、場所取らないから便利だな。」

そう切り上げ、扉を開き、デイクライダーを手に家に入る。リビングに入ると、もう一つ重大なことに気付いた。

「・・・そういえばバイクもらったのは良いんだけど、免許は・・・？」

そう、バイクに乗るには、免許も必要になってくる。しかし、その心配は杞憂に終わった。テーブルの上に封筒が置いてある。開けてみると、免許証、しかも快の名前で記名されていた。その免許証に触れた途端、快の頭にまた堰を開け流れ出る水のような感覚が感じられた。その感覚が終わるときには、快は免許取得に必要な知識をす

べて記憶していた。今ならどこでも行けそんな感覚もあった。

「便利だな。やっぱり。」

と、口にすると、カサ、ともう一つ何か封筒から出てきた。またさらに一回り程小さい封筒であった。開けると手紙が入っていた。

封筒の裏には『紅渡』の名前があった。文面は

『プレゼントは気に入りましたが、デイケイダーは燃料を積んでは  
いません。クラインの壺と呼ばれる機関から無尽蔵にエネルギーを  
取り出せるので、ガソリンスタンドに行く必要はありません。そし  
て、あなたの意思がなければ動かないようになっていきます。あなた  
以外は動かさせませんからあしからず。』

「まあ、そういうことなら」

快は、このプレゼントをありがたく頂戴することにした。

「さて、いつまでも制服姿じゃアレだな。着替えるか。」

そう思い、2階上がり、自分の部屋に入った。ここですぐに快の  
部屋と分かったのは、2階の扉がすべて開いており、1つの部屋以  
外には何も置いてなかったからである。自室は、1人用ベッドがあ  
り、勉強机があり、ベッドと、机の近くには窓があり、クローゼツ  
トが部屋の入つてすぐのところにあつた。広さとしては、広すぎず、  
狭すぎない、それくらいのは広さだつた。クローゼツトを開き、Tシ  
ヤツとジーンズに着替えた快は、自分の家を探検することにした。  
2階は快の部屋以外は空で、それほど気にはならなかったが、1階  
はまだちゃんと見ていなかった。のでまずは台所から搜索した。

「どれどれ。」

ガラスと棚の扉を開けると、パスタや調味料などが出てきた。食器  
棚には皿はもちろん、箸、スプーン、フォーク、ナイフなどがあつ  
た。

そして、冷蔵庫を開くと、卵、飲み物、肉、野菜などがきれいに整  
理されて入っていた。量もそれなりにあり、食糧不足はないらしか  
つた。

「ふむ。」

次はリビングのテーブルの横にある棚を開けた。そこには『○？銀行』と書かれた封筒が幾つかあり、開くと小銭、千円札、五千円札、一万円札に分けられて入っていた。どうやら貯金もできているらしく金欠というわけでもなさそうだった。

「結構、マメなやつなんだな、俺って。」

家を一通り探検した後、小腹が空いたので、もぐもぐと菓子パンを食べながらテレビをつけると、

『任務了解、これより破壊する。』

とアニメが放送されていた。タイトル表記は『新機動戦記ガンダムW』。再放送らしく、画は少し古い。

「へえ、結構面白いじゃん。」とかいいながら、菓子パン片手に快は『ガンダム』を見るのであった。

俺とバイクと俺ん家と・・・、（後書き）

みなさん、こんにちは！夜ならこんばんは！

今回は快の家の詳細を説明しながら、快がバイクを手に入れるお話を書かせていただきました。ほんの少しだけガンダムが登場しました！

次回は、快が自分の召喚獣の秘密を知ります。

ご期待ください！

俺と模擬戦と召喚獣の変身と……、

日付が変わって次の日の朝、

「……おはよー……」

快はげっそりとした顔で教室の障子を開けた。

「どうしたのさ、快、なんかやつれてるよ？」

心配そうに話しかけてくる明久に、

「ああ、まるで徹夜の後みたいだぞ。」

と雄二もやってきた。

「いやな、昨日家に帰ってテレビ点けたら、めちゃくちゃ面しれえアニメやっててよ……見まくっちゃった。」

答える快は、昨日あの後、アニメ、『ガンダムW』を見続け、どハマリしてしまったのだ。しかもなんとそれには、18時30分から朝の5時30分まで一挙放送というとてもない長時間スペシャルだったのである。途中、食べ物は食べたが、何を食べたかすら覚えてはいないほど、食い入るように見てしまったのだ。おかげで、快はビツクリする位寝不足である。

「へ……へへ、快って結構ハマるとことんハマるタイプなんだね……。」

快の意外そうな一面を見て、驚く明久と、

「まったく……、転校初日から何やってんだか……。」

とあきれ雄二、それに反抗するように

「おいおい、ウイング0はすげえんだぞ。ツインバスターマジパねえ。」

と全く説得力のない発言をする快。そこに、

「まったく……、おぬしは戦争前に何をやっとなるんじゃ。」

と男装した美少じよ……じゃない1人の男子、秀吉がやってきた。

「あ、秀吉。おはよう。」

「よう、秀吉。」

挨拶を交わす明久と雄二、快も少し遅れながら

「ああ、おはよう秀吉。」  
と言葉をかける。

「そうだぞ、快、今度の相手はDクラス、それほど賢くはないが、俺たちよりは数段賢い。今日は、一日何もないからな、みんなで模擬戦をやるうと思ってるんだ。」

「ああ、分かってるって。」  
昨日、帰り際に、雄二、明久、ムツツリーニ、秀吉等とアドレスを交換した快は、今日の朝、ガンダムを見終わり、シャワーを浴びて一息ついたところで、雄二からメールが来て、こうして休みの日に、学校に来た次第である。

「ババアからは申請は取ってある。午前中だけなら体育館を使っていいんだよ。」

「ふうん、それにしても、よく許可がおりたな。」  
「以前から考えていたことだしな。ババアからすれば少しでも多くのデータを取っておきたいんだろ。」

「そういうことか、まあでも、俺、召喚獣がアレだしな・・・。」  
と肩をすくめる快の脳裏にはあの丸腰で制服姿の自分の召喚獣が思い出される。

「まあ、その点についても、もう少し調べてみようと思う。鍵は姫路と島田・・・後ムツツリーニが取りに行ってるから、俺たちも行くぞ。」

そう言つて、教室を出ていく雄二を追つて3人も体育館へ向かった。そして、体育館で姫路、島田、ムツツリーニと合流し快達は早速模擬戦を始めることにした。

「召喚許可はババアからもらってるし、フィールドもタイマー式で12時まで使えるようにしておいてもらってる。点数は模擬戦だから無制限だ。行くぞー。」

「サモン！」

全員の召喚獣が幾何学的な紋様から飛び出す。明久、雄二、姫路の



召喚獣は検査の時に見たことはあったが、秀吉、島田、ムッツリー  
二の召喚獣は見たことがなかったので、快はチラ、と彼らの召喚獣  
を見る。秀吉の召喚獣は侍のような姿で、日本刀を持っている。島  
田のは軍服にサーベルという姿。そしてムッツリー二は忍者のよう  
な姿に小刀というそれぞれしっかりした装備を着けている。

「それに比べて俺は・・・」

快の前には丸腰制服姿の召喚獣がいる。やはりとても頼りない。

「じゃあ、とりあえずウチとアキが見本を見せるから見てて。」  
と島田が前に出る。

「え、僕？まあいいや、よし、こい！美波！」

明久も召喚獣に木刀を構えさせる。

「行くわよー、それっ！」

島田の召喚獣が明久の召喚獣に肉薄する。ガン！ガキン！とサーベ  
ルと木刀がぶつかり合う。しかし、所詮、木と鉄である。明久の召  
喚獣の木刀はすぐに折れ、明久はピンチに陥る。ビッ！とサーベル  
が明久の召喚獣の首元に置かれる。

「勝負ありね。アキ。」

「くッ、やるじゃないか美波！」

「と、まあ、ざっとこんなもんかしら。」

召喚獣を消して島田が言う。

「すごいよ美波、扱いが前より上手くなってるね。」

と明久がほめると、

「え！、そ・・・そう？」

と照れるような仕草をし、顔を赤らめた島田。すると

「お姉さまに近づく豚め・・・、殺す！殺します！」

「うわあ！？」

快の横に黒いオーラを放ち、明久を睨んでいるの女子がいた。そし  
ておもむろにシャーペンを取り出し、それを投げナイフのように明  
久に向かって投げた。

「危ねえ！」

咄嗟に手でそれを払った快に、

「何するんですの!？」

と食って掛かる女子に、

「それはこっちのセリフだ!そんなもん人に投げようとして!」

快は強く言った。

「美春!」

と美春と呼ばれた女子に島田が近づいた。すると、

「お姉さま!大変凜凜しゅうございましたわ!」

と先程とはまったく違うキラッキラした目で島田を見ていた。

「島田、知り合いか？」

快が問うと、抱きつこうとしてくる女子を抑えながら

「うん、清水美春しみずみはるって言うの。いつもウチにこうやってくるから大変なの。」

「何を言ってるらっしゃるんですの!私はお姉さまとの愛を確かめているだけですの!」

「アッ、もう抱きつかないの!」

グイーツと引きはがされ、ふと目があった快を見て、清水は島田に聞いた。

「お姉さま、誰ですの?この見慣れない薄汚い豚は？」

「豚って……。」

「ああ、こっちは昨日転校してきた天野快っていうの。」

「おい、豚のところスルーか!」

「ふうん、転校生でしたの。道理で見かけない面だったわけですね。

ま、戦争前に転校生の1人や2人来たところでこの私が軽く捻ってやりますわ。」

自信あり気に清水が言う。

「自信満々じゃねえか。言ってくれね。」

快が言い返すと、

「ええ、なんなら今ここで模擬戦の相手をして差し上げてもよろしいですわよ。」

とさらに言ってきた。そして、快の足元の召喚獣を見て、フツ、と笑い

「まあ、そんな弱そうな召喚獣に負けるはずありませんがね。」  
と挑発するように言った。

「いいぜ！相手になつてやるよ！」

快はその挑発に乗り、清水と対決することになった。

「ちよつと、雄二、止めなくていいの？快、負けちゃうんじゃない？」

「そうじゃぞ、雄二、勝負は目に見えておる。」

「・・・無謀。」

「そうですね坂本君、天野君の召喚獣は痛みのフィードバックがあるんですよ？」

「そうよ坂本、美春のことだからこてんぱんにしちゃうわよ。」

明久たちが快を案じて雄二に抗議する。しかし雄二は気に留める様子もなく、

「いや、このままやらせる。実を言うと、ババアから頼まれてなあいつの召喚獣についてこつちで調べておけて。まったく、人使いの荒いババアだ。」

と言って2人の対決が始まるのを待っている。そして、

「行きますわよ！サモン！」

清水の召喚獣が出現する。武装は短い剣とローマの兵士のような鎧である。

「一気に終わらせて差し上げますわ！」

清水の召喚獣が剣を振り、快の召喚獣に迫る。

「危ないっ！」

明久が叫ぶ。すると快は

「大丈夫。」

サツ、と必要最低限の動作でそれを避けさせる。そして回し蹴りを相手の横っ腹に当てる。ガン！と音が鳴る。しかし、

「いっつっつっつ・・・~~~~~！」

苦悶の表情で転げまわっているのは清水の召喚獣ではなく快と快の召喚獣のほうである。鎧に蹴りを思い切り当てたのだ。フィードバックで足にもものすごい激痛が走る。

「……ダメだな」「……ダメね」「ダメですね」と明久たちも微妙にあきれ顔である。

「ふふ、全くと言っていいほどの素人ですわね！」

剣を快の召喚獣に向かって突き刺そうとしてくる。それを横に転がることで何とか躲す。

「ほらほら！避けてるだけじゃ勝てませんことよ！」

清水の連撃を何とか躲し続ける。

「くそっ！何か手はないのか！？……ん？」

ふと快は自分が何かを持っているのに気づき、見るとそれは、ディケイドドライバーだった。

「なんで!？」

確かに快は昨日のようなことに備え、持ってきてはいたが、鞆の中に入れたはずであった。

「こんな時に、どう使えって、言うんだよ！」

召喚獣を動かしながら、快は考える。すると、ポウ、とディケイドドライバーが淡く光り、快の頭にイメージを送った。

「……！なるほど、そういうことか！」

快は召喚獣を自分のそばに近づけさせた。

「どうしたんですの？降参するなら今のうちですわよ。」

余裕そうに清水が言う。しかし、快も負けなくらいに余裕ぶりながら、

「へっ、それはこっちのセリフだぜ。」

と答える。

「虚勢を張るのもたいがいにしてください。これで……終わります！」

清水の召喚獣が突進してくる。快はディケイドドライバーに力を籠めた。するとディケイドドライバーが快の手の中から消え、小さくなり

召喚獣の腰に巻かれた。

「行くぜ・・・変身！」

快が言うと、召喚獣は快のそれと同じようにライドブツカーからカードを取り出し、ドライバーに装填した。そしてドライバーを回転させた。

《カメンライド デイケイド！》

電子音が鳴り、召喚獣に灰色の装甲がつき、灰色からマゼンタカラーへと色が変わる。召喚獣が小さなデイケイドになったのである。

「なるほど、道理で最初の姿が丸腰なわけだ。」

「快の召喚獣の姿が変わった!?」

「すごいです！そういう仕掛けだったんですか！」

「変身とは、さすがに想像できなかったのう！」

「なんだか強そうだわ！」

「見たことがないタイプ・・・。」

明久たちが驚きの声をあげるなか、1人、清水は狼狽した。

「なっ、なんですかのそれは!？」

「フッフッフ、これはな・・・。」

と説明しようとしたが、なぜか、心のどこかで、自分がライダーであることを隠せ、と告げる声があった。一瞬悩み、はぐらかすように、

「あー・・・企業秘密だ!!」

と言った。そして、有無を言わせないように、カードを取り出し、ドライバーに装填させる。

《アタックライド スラッシュ！》

と電子音が鳴りライドブツカーをソードモードに変え、召喚獣を突進させる。

「クッ！」

清水は召喚獣に受け止めさせる構えをとらせた。しかし、剣同士がぶつかり、バキーン！と大きな音が鳴ると、清水の召喚獣の短剣は根元からポツキリと折れていた。

「なっ……！」

相手が動く前に快はライドブッカーを清水の召喚獣の首元に置かせ、宣言した。

「勝負ありだな。」

シウウウンと音を立て召喚フィールドが消えていく。どうやら約束の12時を過ぎたようだ。あの後清水は「今日は、今度の対戦相手に挨拶をしに來ただけですの。先ほどは驚いて何もできませんでしたが、次戦うときは負けませんわ。」

といかにも負け惜しみのなことを言っつて、体育館を後にした。

「しっかし、すごかつたな、快の召喚獣。まさかあんな仕掛けがあつたなんてな。」

帰り、快は雄二、明久と一緒に歩いていた。快はバイクもあつたが今はまだ使つていない。

「そうだね、すごかつたよ、一気に決着を着けてたもん。」

「ああ、まあ俺もあの時初めて使つただけだな。まさかうまくいくとは思わなかつた。」

快は得意げに話している。初めて見たときはすごく弱そうだった自分の召喚獣が本当はすごく強かつたことがうれしかつた。

3人はわいわいと話しながら学園を後にした。

その日の夜、誰もいない召喚獣制御システムマシン室、そこに、突如、召喚フィールドが出現する。誰もいないはずのこの場所で、なぜフィールドが出現したかは謎である。そのフィールドの中央にゆらゆらとホログラムのような塵気楼のような、あるいは幻のような、人の影があつた。その影は、小さくつぶやいた。

「……天野……快……」

そして突然、フィールドはその影もろとも消えてしまった。そこには、稼働していない制御システムマシンが置いてあるだけであつた。

俺と模擬戦と召喚獣の変身と・・・、（後書き）

こんにちは！作者です！

召喚獣が変身というところでもない展開になりました！

これは、この作品を作る前から考えていたアイデアです。皆さん、いかがでしたでしょうか？

そして清水美春が登場です！これからも、どんどん準レギュラーキヤラを出して行きたいと思います！

余談ですが、冒頭のガンダムWのくだりは後々ストーリーに関係してくるのでお楽しみに！では、次回にお会いしましょう！

## 俺と気持ちと開戦と・・・、

快の召喚獣が変身すると分かった次の日の月曜日、今日からDクラスとの戦争が開始される。快は、学園までバイク、デイケイダーで向かった。途中、同じ文月学園の生徒が制服姿でバイクに乗っているのを見て、驚いている数人の学園生徒の姿を見た。学園より少し離れたところで、誰も見ていない事を確認し、ボタンに触れ、バイクを手のひらサイズにして、鞆に入れた。まだ、申請をしてないためあまり騒がれなくなかったからである。

そして教室、そこではFクラスの全員と作戦会議を開いていた。

「いいか、今日からDクラスとの戦争が開始される。俺がクラス代表で問題はないな。」

雄二が慣れた感じでそういつている。快は後ろのほうでそれを聞いていた。

(俺はうまくやれるだろうか・・・)  
そう考えていると、

「快は、今回は初めての戦争だからな。自由に動いてくれて構わない。でも無理はするな。」

「あ、ああ、わかった。」

快のほうに視線が向く。快は、そう答え、説明の続きを促した。

「・・・ここは階段から・・・」

雄二は指揮官が似合うな、と快は思った。こういう大勢を動かす能力に長けている。そう思いながら、快は作戦会議を聞いていた。しばらくするとキーン、コーン、カーン、コーンとベルが鳴った。

「もうすぐ戦争が始まる。全員、死んでも勝て！」

「オウ！」

作戦会議を切り上げ、全員の周りに緊張した空気が漂う。西村先生が入ってきた。

「もうじき戦争が開始される。そのことに関して一つ学園長から注



注意事項がある。」

この大事な時間に、なんだろうか？全員がその言葉に耳を傾けた。

「全員、今回は勝つことしか考えていないだろう。しかし、それではつまらないと学園長が提案を出しそれを自分の権限で通した。」

「おい、鉄人、勿体ぶらずはつきり言えよ。」

雄二がそう言うと、

「西村先生と呼べ。そして今から言うから待て。えー、お前たちは今の教室の設備がもう下がらない。そう思っているだろう。しかし、そうではない。学園長は新しいペナルティを用意した。」

「なんだと!？」

雄二が狼狽する。

「お前たちが、この戦争で負けたら、さらに設備がランクダウンする。それが今回のペナルティだ。」

『ナ・・・ナニイイイイ!？』

全員に動揺が走る。

「どういうことですか!？これ以上何が下がるっていうんですか!？」

快も動揺を隠せず鉄人に詰め寄る。

「さあ、私にもそれはわからない。だが、何かしらなくなるのだから。では、そういうことだ。全員これ以上設備が悪くならないよう頑張れよ。」

そう言つて、教室から出て行ってしまった。

「畜生！ババアの奴、飛んでもねえこと言いだしやがった！」

雄二が悪態をつく。そこに明久が

「どうするのさ雄二、負けたらこれよりひどくなっちゃうんだって。」

とミカン箱を見ながら言う。

「ああ、もう負けられねえぞ・・・!」

「これ以上ひどくなるなんていやだぜ・・・」

「いよいよ、なにもなくなるんじゃないやねえか、ここ・・・」

皆も口々に、不安の声をあげる。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』  
教室が一気にシュンとなる。すると

「・・・・あゝもっつ！！なに始まる前から負けるみたいな空気出してんだよ！勝てばいいんだろ！！勝てば！！」

快が嫌な雰囲気を払拭するように立ち上がり、叫ぶ。

「俺は転校してきてまだ日が浅いからそんな大それたことは言えねえ！だがこれだけは言える！最初っから士気が低くかったら勝てるものも勝てねえ！勝ちたいんだろ！？だから、皆必死こいて勉強してきたんだろ！？」

快はそこで一度区切り、息を吸った。

「皆、一人一人違う目的があつたとしても、勝ちたいのは同じだろ！？だつたら・・・・・・・・！」

快がさらに言おうとすると、雄二がそれを制した。

「雄二・・・・・・・・！」  
「まったく・・・・・・・・。転校生のくせに言ってくれぬぜ・・・・・・・・。」  
そういう雄二の顔はどこか覚悟を決めたようだった。

「どうしたお前ら！転校生にケツ叩かれねえと動けねえなんてそれでもいいのか！？」

雄二が全員に向かって言う。雄二も雄二なりに皆を鼓舞しようとしている。

『・・・・・・・・』  
少しの沈黙が流れ、そして、

「へっ、そんなわけねえだろ！」

「ああ、そうだ！Dクラスになんか負けねえ！」

「さっさとこんな汚い教室おさらばしようぜ！」

段々と声があがる。皆に士気が戻っていく。

「やってやるうよ雄二！」

「Dクラスの連中に一泡吹かせてやるうぞー！」

「・・・・・・・・絶対勝つ・・・・・・・・」

「やるわよー！」

「私もがんばります！」

明久たちも完全に士気を取り戻し、やる気に満ちている。

「よし！俺たちならやれる！行くぞー！！」

『ウオオオー！！』

全員が団結し、士気が最高潮に達したとき、アナウンスが鳴った。

『それでは、只今よりFクラス対Dクラスの召喚獣戦争を始めます。

』

短いアナウンスだったがそれ以上は語ることは無かったようだった。

「さあ、Fクラス魂を見せてやるぜ！」

須川が教室から意気揚々と出ていき、皆も作戦会議で指示された場所へ向かう。

「じゃ、俺も行きますか・・・」

快が障子に手をかけると、

「ちよつと待て。」

雄二に引き留められた。

「なんだよ雄二。」

快が問うと、雄二は快の肩に手を置き言った。

「快、さっきお前には自由に動いていいと言ったが、あれは嘘だ。」

「嘘？」

「ああ、お前にも役目がある。」

不敵に笑いながら言う。

「とっておきの重要な役目がな。」

俺と気持ちと開戦と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！

いよいよ開戦です！今までなかなか戦争編に入れなくてすみませんでした！

これからもガンガン書いていくのでお楽しみに！

次回は快が戦場を駆け抜けます！

ご期待ください！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4244x/>

---

バカとテストと召喚獣と・・・、

2011年10月20日03時05分発行